慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	政治経済への民族誌学的接近
Sub Title	An ethnographic approach to political economy
Author	織田, 竜也(Oda, Tatsuya)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2002
Jtitle	哲學 No.107 (2002. 1) ,p.105- 130
JaLC DOI	
Abstract	Recently one of the central problem in cultural anthropology, there is the work constructing a new flame corresponding to changing fields. George Marcus has presented the possibility to adopt Political economy and Cultural anthropology of interpretation and to construct "multi-sited ethnography". This paper studies from this point of the presentation by George Marcus, and the base of economic anthropology. Richard Wilk pointed that the flame by Karl Marx showed the relation of "base-super structure". This view is help for describing the economic situation of fields. Because of the conceptual tool from material to ideal. Maurice Bloch said that "Cultural Materialism" by Marvin Harris is not Marxism and that the critique by Marshall Sahlins is not fit for Marx but Harris. Maurice Godelier developed this view by Marx into the relation "from awareness to meaning". This area means that our world is virtual. James Carrier used this term "Virtualism" in his editorial book. But our use is different from Carrier. Everything peoples can face is changing into something. No matter what is, materials or ideas, it is important that we pay attention to the Integration of things. Sometimes systematically, and the other times wholly. An anthropologist in his field understands by his feeling. This feeling is constructed by his life and the situation of his field. So if our world is global system, he can find something global in his field. That is the process of real world, and also the system of explaining the world. On the virtualistic stance of view, can we see the global system? The study to answer this question theoretically, I think, means the outline between "Political Economy" and "Ethnography".
Notes	特集文化人類学の現代的課題 論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000107-0108

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

政治経済への民族誌学的接近

織　田　竜　也*

An Ethnographic Approach to Political Economy

ODA Tatsuya

Recently one of the central problem in cultural anthropology, there is the work constructing a new flame corresponding to changing fields. George Marcus has presented the possibility to adopt Political economy and Cultural anthropology of interpretation and to construct "multi-sited ethnography".

This paper studies from this point of the presentation by George Marcus, and the base of economic anthropology. Richard Wilk pointed that the flame by Karl Marx showed the relation of "base-super structure". This view is help for describing the economic situation of fields. Because of the conceptual tool from material to ideal.

Maurice Bloch said that "Cultural Materialism" by Marvin Harris is not Marxism and that the critique by Marshall Sahlins is not fit for Marx but Harris. Maurice Godelier developed this view by Marx into the relation "from awareness to meaning". This area means that our world is virtual.

James Carrier used this term "Virtualism" in his editorial book. But our use is different from Carrier. Everything peoples can face is changing into something. No matter what is, materials or ideas, it is important that we pay attention to the integra-

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程

tion of things. Sometimes systematically, and the other times wholly.

An anthropologist in his field understands by his feeling. This feeling is constructed by his life and the situation of his field. So if our world is global system, he can find something global in his field. That is the process of real world, and also the system of explaining the world. On the virtualistic stance of view, can we see the global system? The study to answer this question theoretically, I think, means the outline between "Political Economy" and "Ethnography".

1. はじめに

近年の文化人類学における主要課題の一つに，調査地の変容に対応可能なフレームを模索する作業がある．「西欧/非西欧」世界に対応する形で成立した「文明/未開」という図式の崩壊以降，文化人類学を含めた広義の人文社会科学の領域では「近代化（含ポストモダン)」，「工業化」，「産業化」，「資本主義」，「市場社会」，「消費社会」，「開発」といった概念で変容する地域の現象を汲み上げてきた．文化人類学ではフィールドワークを基本的手法として用い，その際調査者はフォークターム (folk term) や世界観 (cosmology) の獲得を目指すが，フィールドでの知の獲得は調査者にとってある種の「発見」であって，初めて体験する概念や現象の観察から記述へのプロセスにおいては「解釈」や「翻訳」，「再構成」を必然的に行わざるを得ない．したがって「調査地の変容」，「観察—記述過程」，この二つの面から，文化人類学における現代的課題は発生している．

こうした課題を克服するための新たなフレームの模索について積極的な提言を行っているのがジョージ・マーカスである．その一環としてマーカスは政治経済学と解釈学的人類学の接合可能性を探り，「マルチサイト民族誌 (multi-sited ethnography)」[1] を提案する．本稿でははじめに「マルチサイト民族誌」へ至るマーカスの一連の考察を検討する．そこで問題と

[1] [Marcus, 1998 [1995]].

なるのは個別の現象を包摂するより大きなパラダイム，地球規模で繋がり合う政治経済への民族誌学的接近方法である．イマニュエル・ウォーラーステインによる世界システム理論[2]の影響を受けた諸研究も含め，マーカスはマルクス主義のフレームを用いた研究から新たな視座が生まれる可能性を求める．だが同時にそれは結局パラダイムのはめ込み，もしくは置き換えに過ぎないのではないかとの疑問を提出する．

民族誌学がマルクス主義のフレームを用いた場合の有効性と限界はどのような原因によって生まれてくるのだろうか．それを探るためには広義の経済人類学におけるマルクス主義の位置を再確認する作業が適当だと思える．ここではまずリチャード・ウィルクによる経済人類学の整理を導きとし[3]，ポスト啓蒙主義の時代からエミール・デュルケムを経てイギリス社会人類学に至る流れの中に，どのようにマルクスが位置付けられるのかを確認する．次にモーリス・ブロックの著作[4]からマルクス主義とイギリス社会人類学，フランス構造主義との関係を確認する．こうした作業によって民族誌学がマルクス主義のフレームに依存する場合，「物質」と「観念」の連関を明らかにすることの重要性が浮かび上がる．

マルクス主義のフレームの有効性は民族誌学的調査を行った場合でも，「資本」や「階級」，「労働」，「再生産」，「イデオロギー」といった概念が既に用意され，研究者に共有されている点にある．そしてその最大の魅力はおそらく，「生産様式が観念世界を形成する」と規定された「土台―上部構造」の連関にある．これによって経済を含めた生産領域の物質的コミュニケーションの観察から観念世界の獲得へと（昇華して，あるいはす

[2] 世界システム理論は歴史的考察から生まれた抽象的概念だが，ウォーラーステイン自身は研究の重要性を「ことは実証の問題ではなくて，概念の問題なのだ［ウォーラーステイン，1981: 3］」と感じ，「主観的なかかわり合いのない社会科学研究などありえないというのが私の信念である［ウォーラーステイン，1981: 12］」として概念への態度を記している．

[3] [Wilk, 1996].

[4] [ブロック，1996].

り替えて）記述することが可能となるのである．

だが「物質」を観察することを基礎として「概念」を用いて記述を行うある種の「ステップアップ」に対して，マルクス自身がどのように考えていたかを遡って考察するのが最適な問いだとは思えない．なぜならこの「ステップアップ」はマルクス「主義」として使用されるフレームを用いた場合に顕著であり，さらには広く「観察—記述過程」において文化人類学者の誰もが経験するジレンマとしても捉えられる．つまりフレーム全体を認識論的に検証する方向により建設的な考察があると思われるのである．ここではモーリス・ゴドリエの研究[5]を手がかりに，マルクス主義による「物質から観念まで」を繋げる基本的思考を検討する．

政治経済への民族誌学的接近においては「ヴァーチャリズム」という概念も使用されるに至った．ジェームス・キャリアーは「経済的実践は経済的思考を形成する．さらには，経済的思考が経済的実践を創り上げる．」[Carrier & Miller, 1998] と述べている．だが本稿で使用する「ヴァーチャリズム」はこの使用とは異なるものとなる．その試みは端的にいって地球規模の現象を民族誌学的に描く「可視のグローバルシステム」の実現であろう．

したがって物質世界，マルクス主義のフレームにおける「土台」に含まれる領域をも人間の認識過程における観念世界として捉え，物質主義を解釈学的人類学の位相，ヴァーチャリズムの地平に置き直す必要がある．その後にそうした認識過程の「結果」として生成される表象空間における概念それ自体を，生活領域との関わりにおいてシステマティックに描く．この作業をマルクス主義のフレームを破壊しつつ実践することは理論的には可能かと思われる．

本稿の課題は物質主義からヴァーチャリズムへと繋がる領域における諸前提を再検討し，民族誌学的記述を構築する可能性について明らかにする

[5] [ゴドリエ，1986]．

ことにある．すなわちフィールドでの物質主義から出発する文化人類学が解釈学的ヴァーチャリズムを経て再び帰還する地点，そこで行われる意味の「解読」と「付与」の双方を携えた記述．政治経済と称される領域への民族誌学的接近は「感覚世界」と「意味世界」の往還をシステマティックに描くことで前進する．

2. 民族誌学の現在—マルチサイト民族誌—

現代の文化人類学的課題としてマーカスは政治経済への民族誌学的接近を試みる．まずは論文「世界規模の歴史的政治経済の説明—社会を大規模システムとの関連で知ること」[マーカス＆フィッシャー，1996]からマーカスの問題意識を探ってみよう[6]．文化人類学が行う特定地域における長期のフィールドワーク，そのミクロな観点から得られた豊富なデータは重要であることは間違いない．だがその重要性が転倒する状況がマーカスの問題提起の原点である．

> 豊かに描かれてきた地域的文化世界は，それよりも規模の大きい匿名的な政治経済システムに埋め込まれているという事実をどのように表象するのか．[マーカス＆フィッシャー，1989: 151]

つまり文化人類学が地域文化を一つの孤立した単位として描く手法（市場や国家は外部から文化に影響を与える力として捉えられる）からの脱皮を訴えているのである．この視点は文化を不断に変化する流動的状況とし

[6]『文化批判としての人類学』はフィッシャーとマーカスの共著であり，その執筆手順は次のようである．まずマーカスが議論のスケッチを描き，ライス大学人類学部のメンバーと討論，特にフィッシャーとは対話を繰り返す．後にマーカスが原稿の初校を作成し，これにフィッシャーが大幅な手直しを加え，さらに両者が草稿を再検討した．本稿では『文化を書く』でのマーカスが担当する章において重複して書かれた関心を取り上げるため，マーカスの研究として論を進めている．

て捉え，市場や国家や文化の「内的統合」を打破する．その具体的展開はどのようなものになるのか．

匿名的な政治経済システムへの接近方法として，従来の研究から政治経済学に関わる三種類の研究が提示される．それぞれ①民主主義社会における公的選択・集団行動，②マルクス主義：特に資本への依存性と開発途上の問題，③史的観点からの世界システムにおける政治過程と経済活動との相互決定性である．中でも大きな影響力を持ったのはウォーラーステインの世界システム理論だが，マーカスがその重要性を世界システムが「ドグマ」として定着せずに，ミクロレヴェルでの地域研究や歴史研究の活性化を促した点に見ているのは優れた見解である[7]．

政治経済学のマクロシステムからミクロプロセスへの関心の移行は民族誌を志向する研究を生み，その最も洗練された例としてポール・ウィリス『ハマータウンの野郎ども』［ウィリス，1996］があげられる．ウィリスはマルクス主義が使用してきた用語を民族誌学的調査を踏まえて「文化」の用語へと変換し，同一の概念が見る立場によって，心象的に異なる意味として立ち現れてくることを示す．すなわち抽象的な分析概念が生活領域で用いられる状況，いわば「フォークターム化」している場合においても，人々の立場（ウィリスの場合特に「階級」）によってその言葉が喚起するイメージが異なるのである．例えば「本」や「論文」といった具体的な物質を示す語彙が「知的労働」という概念によって統合され，それが「労働者階級」においては「敵対物」として感知されるのである［クリフォード＆マーカス(編)，1996: 319］．このような領域を描く際に民族誌は大きな力を発揮する．

[7] 筆者は世界システム理論と人類学の接合可能性について日本民族学会第34回研究大会（2000年5月）で「人類学におけるシステム論的認識の諸前提」として発表したが，ウォーラステインの世界システム理論を受容するにせよ批判するにせよ，世界システムを「ドグマ」として扱う態度は建設的ではないと思われる．

あるいはチャールズ・セーブル『仕事と政治学』[Sabel, 1982]では，1960年代にイタリアの「第三ゾーン」において，職人的様式が新フォード主義（大量生産モデル）にとってかわった状況を民族誌学的に描くことで，労働者と資本家の関係をミクロに分析することを可能にしている．ここでも抽象としての「労働者」と「資本家」概念，単純な二項対立モデルが微視的に観察されることで，マクロシステムが安易にミクロプロセスに適用されることへの批判が成立している[8]．

マーカスは続いて解釈人類学と政治経済学の融合に関して論ずる．人類学の政治経済への関心としてイギリスでは1940年代に行われた東アフリカにおけるゴドフリー・ウィルソンとマックス・グラックマンのプロジェクト[9]をあげ，またアメリカでは1960年代以降のエリック・ウルフ，シドニー・ミンツ，ジューン・ナッシュ，エレノール・リーコックらの研究[10]をあげる．マーカスによれば前者は伝統的政治経済が外部の植民地主義によって崩壊するという視点により，後者は単純マルクス主義にたてこもり，ともに開かれたフレームを構築できなかった．例えばエリック・ウルフ『ヨーロッパと歴史なき人々』[Wolf, 1982]に対する批判は「文化にたいする解釈学的な見方を観念主義の一形式としてイデオロギーの範疇に位置づけ，古典マルクス主義の言う上部構造にあたると見なしている[マーカス＆フィッシャー，1989: 164]」点にあるとされる．つまり物質主義を徹底することで，解釈を行うこと自体が「観念主義」であると拒否されてしまうのである．ここには物質主義と観念主義，現象と解釈を接合

8 スペインについてはジューン・ナッシュ編集の「仕事の人類学」シリーズにローレン・ベントンによる『不可視の工場』[Benton, 1990]がある．

9 [Gluckman (eds.), 1964].

10 マーカスはウルフ[Wolf, 1982]とナッシュ[Nash, 1979]を取り上げるがミンツとリーコックには触れていない．ミンツはマルクス主義を世界システム理論として受容し[Mintz, 1960]，リーコックは階級概念をジェンダー論に流用して研究を行った[Leacock, 1981].

する困難が表れている[11].

したがってマーカスの希求する政治経済の領域を十分に含んだ良質の解釈学的人類学は依然書かれてはおらず，だからこそ書かれなければならないと主張する．その可能性は二つあり，第一は農民社会研究，第二は中産階級，エリート，特殊専門職，産業労働力の再組織化などへの民族誌的接近であるとされる．マーカスはウィリスの研究を一つの民族誌学的達成として評価しつつ，「労働者階級」だけではなく，それとは異なる「階級」の調査を並行して行うことを訴えている．これはマーカス自身がアメリカの「中流階級」と「富裕階級」を併置する民族誌を進行させていることからも明らかである．世界システム理論を含めたマルクス主義の可能性としては次のような見解を示す．

> 政治経済に注意を向ける民族誌を補足するのに必要な，大規模システムを背景として表わす最も強力なイメージとは資本主義のイメージである．このイメージは，最近の折衷的な世界システム理論も含めたうえで，長い伝統を持つマルクス主義の著作のなかに常に頻繁に喚起されてきた．［マーカス＆フィッシャー，1989: 167］

だが一方でそのフレームに対する疑問，問題点を提出することも忘れてはいない．

---

11 ミンツは『甘さと権力』においてフィールドワークの手法を用いなかった点を遺憾としながら（本書は砂糖の生産・流通・消費を歴史学的に扱う），「ひと，モノ，行為がいかにして，意味のあるかたちで統合されるのかという問題は，人類学的に大いに興味を惹かれる問題であるが，こうした問題は，原始的な社会同様，現代社会においても追求することができるのである［ミンツ，1988］」と述べている．

しかしながらこの方向での実験的試みが約束しているのは，結局それらが資本主義に対するマルクス主義的見方のような影響力の大きいパラダイムを根底から再構築（もしくは新しいもので置換）していく点である．こうしたパラダイムは，民族誌学的研究が欠如しているために，パラダイムが包括しようとしている移りゆく現実との接点を失っているのである．［マーカス＆フィッシャー，1989: 167-168］

つまりマーカスはマルクス主義のフレームに対して有効性を認めつつ，民族誌学的研究を接合していくことで克服すべきであると考えているようである．だがマーカスが可能性ありと見る対象としての農民，中産階級，エリート，特殊専門職，産業労働者といった集団になされる区分（「階級」よりは曖昧であっても）は妥当だろうか．ブルデューの実践理論に対する好意的理解［マーカス＆フィッシャー，1989: 165］と合わせて，解釈学的人類学における意味論から行為論への移行が潜在的に志向されていると思われる．しかしながら現時点では，マーカスは大規模な連関を「システム」として捉え，それ自体をテクストに書き込む「マルチサイト民族誌」の提唱を訴える．別稿「現代世界システム内の民族誌とその今日的問題」［クリフォード＆マーカス(編)，1996］に示されたマーカスの戦略をまとめれば次のようになる．

①調査→状況の連続性・同時性による配置→システム自体の民族誌学的説明の提示
②調査→システムを背景として配置→マクロシステムに接合されたテクストの提示

①を実行しようとすれば，確かに複数地域を同時に対象とする民族誌学

的研究が必要となる．その具体的構想は依然不透明なままだが，展望として「世界システムの中の，あるいはそれ自体に関する民族誌」[Marcus, 1998 [1995]: 86–95] に興味深い研究群がサーベイされている．「グローバル—ローカル」といった両極的状況を「マルチサイト民族誌」が横断的に駆け抜けるために，マーカスは「システム」を「テーマ」として読み替え，何らかの「テーマ」に注目した「マルチサイト」研究を推奨しているかに見える．

例えば思想的にはフーコー，ドゥルーズ＆ガタリ，デリダ，リオタールらによる「世界把握のイメージ」をあげている．また「人間」に注目すれば移民研究におけるローズやウィリス，「モノ」に注目すればミンツやアパデュライ，「現代芸術研究」に関するマイヤーやシルバーマン，「メタファー」: マーティン，「発話・物語・因果」: ブルークス，ボヤリン，「伝記」: フィッシャー，「紛争」: ギンスブルグといった具合である[12]．結論として「マルチサイト民族誌」は状況的活動家としての人類学者によって達成されることになるが，これは人類学者が学者に留まることなく，（簡単な例として）ある時は学生，ある時は労働者，ある時は消費者として状況を参加的に観察し，それぞれの視点を融合することを意味する．つまり「マルチサイト民族誌」の概略的理論は個別のテーマに依存すると，マーカスは現時点で考えていると見て良いだろう．

3. 政治経済と民族誌—その方法の系譜—

マーカスの「マルチサイト民族誌」は確かに解釈学的人類学のグローバルな展開を示している．これを実現するためには一人の研究者が繋がりがあると思われる地域を次々と渡り歩いて入念なフィールドワークを達成するか，事前に認識フレームを共有する共同研究者が情報を交換し，その都

[12] マーカスの論文 [Marcus, 1998 [1995]] 自体がサーベイ論文であり煩雑になるのでそれぞれの文献はとりあげない．

度次の対象を変化させていくか，である．だが考えてみればこうした態度は優れた研究者によっては自明のことであり，従来の「シングルサイト民族誌」においてもフィールドとは異なる場所で得られた情報が皆無だとは言えまい．したがって問題は依然，経験論的方法の妥当性を最大限に考慮しつつ，「グローバル」なり「システム」なりの「マルチサイト」を必要とする世界規模の連関を射程に含めることができる認識論的視座の設定にある．

マーカスの指摘する通りマルクス主義のフレームは「資本主義」を中心に据えることでその視座を確保してきた．しかしながら必ずしもマルクス主義だけが優位にあるのでもない．経済活動と生活世界の連関を人類学的に考察してきたのが広義の経済人類学である．したがって経済人類学におけるマルクス主義の位置をリチャード・ウィルクの整理を導きとして確認しておこう．

ウィルクは『経済と文化—経済人類学の基礎』[Wilk, 1996] において，狭義の経済人類学に限定せずに，経済学の新古典派，政治経済学，文化経済学などを含めた考察を行っている．政治経済学との関連では，19世紀のポスト啓蒙時代においていわゆる「社会理論」が登場したとするロバート・ニスベットの整理を引用する．この時代の主要な社会理論は三つあり，それぞれ①ジェレミー・ベンサムからハーバート・スペンサーに亘る「自由 (liberals)」，②カール・マルクスによる「革新 (radicals)」，③エドモンド・バークによる「保守 (conservatives)」である [Wilk, 1996: 75]．重要なのはその内容よりもむしろ，こうした理論が人々の望みや振る舞いを「人間性 (human nature)」概念として抽象化する点にある．

19世紀後半社会理論を一新するエミール・デュルケムが体制側 (establishment)，つまり③「保守」であったのと対照的に，②「革新」のマルクスは貧しい記者であったことをウィルクは指摘する．この相違が「人間性」概念への異なる眼差しを生み，人間はその母体である「社会」に対し

てデュルケムの場合「統合」へ，マルクスの場合「階級」による「分裂」へと向かう．この二つの理論が経済人類学にどのように影響したのか．デュルケムからの影響は次の三つの点に顕著だとウィルクは考える．

①反・功利主義 (anti-utilitarianism)

新古典派経済学の基礎が経済人（個人の合理的選択）の設定にあることは論ずるまでもないが，デュルケムはこれを認めない．価値は社会的構築物であり，合理性や必要性から生じるものではないと考える．経済もまた社会に埋め込まれていると考えられ，この発想は後のカール・ポランニーの経済史研究に代表される実在主義 (substantivism)[13] の支柱となった．

②反・個人主義 (anti-individualism)

デュルケム社会学に個人は登場しない．社会的事実は個人の総和ではなく，それよりも大きな独特の実在として事物のようにまとまった規範や法を持つ．社会は自立的であり，自らを維持するよう機能する．この点も実在主義に受け継がれた．

③類型的進化主義 (typological evolutionism)

功利主義同様にデュルケムも非西欧社会をヨーロッパ理解の道具として利用した．「未開から近代へ」，「単純から複雑へ」という進化主義的な観点から，オーストラリアアボリジニーを原点に据えた．そこから出発して人々の結びつきは「機械的連帯」から「有機的連帯」へと移行していく．

以上三点に加えて，デュルケムは経済行動が社会に規定されると考えた

[13] サブスタンティビズムは邦訳では「実在主義」もしくは「実体主義」とされるが「実質主義」，「本質主義」，「現実主義」と訳す可能性も残される．栗本慎一郎は哲学的存在論及び認識論に関連付け「人とその環境との間の制度化された相互作用の過程［栗本，1979］」と定義しており，本稿でもこれにしたがった．

が，ウィルクがそこに欠けていると考えるのは「政治学」である．社会集団はその維持を目指し，それほどスムーズにまとまりを持つのだろうか．そこには利害の調整や闘争が生まれるのではないか．この問題に焦点をあてたのが他ならぬマルクスだったのである．

マルクスがデュルケムと一致する点は「経済が社会に埋め込まれている」ことだが，デュルケムが社会を「ユニティー (unity)」とみなすのに対してマルクスはそこに「階級」による「分裂」をみる．人々の意識はコスモロジーや儀礼体験から構築されるのではなく「労働 (work)」によってである．また労働の具体的局面としての社会の物質的土台が歴史を構築すると考えた．ウィルクの整理にしたがえばその図式は下記のようになる [Wilk, 1996: 86].

上部構造 (super structure)	イデオロギー
	法—政治
土台 (base)	生産関係 生産力

図の矢印は「土台」が「上部構造」に影響を与える「原因—影響」関係を示している．この箇所が後に，「経済（物質世界）が観念世界を規定する」と考える唯物史観を生む．社会と経済の関係に加えてそこでの利害調整としての政治が焦点化されることで，社会学・経済学・政治学が融合することとなった．だがそれぞれの領域や概念化は依然として明確ではない．マルクス主義のフレームにおいては上記の「土台—上部構造」の関係についても，その妥当性は何が保証しているというのか．またどの社会においてもその関係は見出せるのか．いましばらくウィルクの議論を追いかけてみよう．

デュルケム及びマルクスから派生する人類学的研究はウィルクによれば

三つの潮流が認められる．①イギリス社会人類学（ラドクリフ・ブラウン，エヴァンス・プリチャード，マイヤー・フォーテス），②新マルクス主義人類学（フランス，アメリカ），③歴史経済学（従属理論，世界システム理論）である．

イギリス社会人類学におけるラドクリフ＝ブラウンへのデュルケム社会学からの影響はこれまでも十分指摘されてきたが，政治及び経済の問題はどのように扱われていたのか．周知のとおり「構造―機能主義」は親族を基本とする社会関係を探ることで，規範や義務，権利と結びついた社会的役割を明らかにする．ラドクリフ＝ブラウンにとっては，アンダマン島民が植物を植えたり家を作ることはそれ自体を意味するのではなく，社会関係の構築として顕現するのである．したがって経済活動もまたそれだけを取り出したところで大きな意味はなく，真に考察の対象となるべきは「社会構造」なのである．つまり経済は「社会構造」の一表象と理解される．

エヴァンス＝プリチャードは「社会構造」が経済と深く関係していると考える．だが例えばヌエルの生活は穀物と漁に大きく依存しているにも関わらず，彼らの意識は家畜へと釘付けになる．なぜなら家畜の扱いこそが親族関係や政治の機能と結びついているからである．故に経済それ自体を考察することは難しく，ここでもやはり「社会構造」を探ることが研究目的となる．

したがって19世紀のポスト啓蒙主義から初期の人類学への系譜において，デュルケムの視座は脈々と受け継がれ，「ユニティー」か「階級」かがマルクスとの分岐である．初期のイギリス社会人類学では「ユニティー」の位置に「社会構造」が置かれるが，政治・経済はそこに埋め込まれている．フィールドで入手されるさまざま情報が「社会構造」の一表象と理解される流れは，解釈学的人類学の萌芽的状況である．

それ以降の経済人類学的研究の二大潮流はパラダイム構築に焦点を合わせれば，「経済が社会に埋め込まれている」としたポランニー以降の実在

主義と，「経済（物質世界）が観念世界を規定する」としたマルクス主義という分類が可能である．マルクス主義は先に見たように，「土台―上部構造」をパラダイムとして提示するため，それが妥当性を持つ限りにおいて有効である．つまり先の図で示した矢印の部分の妥当性であり，マーカスがウルフを批判するのもこの点に要約される．したがってマーカスの示した政治経済学と解釈学的人類学の融合に関する問題を別の角度から見れば，残された問題は「政治」，「経済」，「社会」，「構造」，「システム」といった諸領域の「相関」をどのように接合させるのかにつきる．

一方マルクス主義に関連する人類学的研究は膨大であり，クロード・メイヤスーやモーリス・ゴドリエに代表されるフランス新マルクス主義，またイギリスでは先に触れたウィリスの他にモーリス・ブロック，消費の民族誌学的アプローチを実践するダニエル・ミラー，アメリカでもウルフばかりか，シドニー・ミンツ，ジューン・ナッシュ，スコット・クック，マイケル・タウシッグ，世界システム理論のウォーラーステイン，特にシカゴではアージュン・アパデュライやジーン＆ジョン・コマロフなどの研究がある．しかしこれらをマルクス主義の名のもとに一括して取り扱うことは不可能なので，マルクス主義と人類学の関係を論じたモーリス・ブロックを取り上げた後に，マルクス主義に懐疑的な眼差しを持ちまた構造主義との融合も視野に入れた活動を続けるゴドリエに注目し，「土台―上部構造」の妥当性を中心に検証する．

4. 物質世界と観念世界の境界

ブロックは『マルクス主義と人類学』［ブロック，1996］でマルクス主義とアメリカ人類学の繋がりを論ずる．ブロックによればアメリカ人類学におけるマルクス主義は当初「進化論」として排除されるが，1960年代以降レスリー・ホワイト（単系進化）がジュリアン・スチュワード（多系進化）と結び付けられ，またマーヴィン・ハリスが「文化唯物論」を提唱

することで大きな影響力を持ったとする[14]．ハリスの理論は「人間の制度や概念は自然情況の直接的な帰結だと考える理論［ブロック，1996: 180］」と要約されるように，機械的唯物論は「土台」（特に自然環境と技術）を最重視する．しかしながらブロックのハリスへの批判は厳しい．

> 政治学も弁証法もなく，意識についての考察もなければ，マルクスの進化論的な順序の側面をまるで受容してないのだから，その主張にもかかわらず，ハリスはいささかもマルクス主義者ではないと結論できるだろう．［ブロック，1996: 182］

文化を自然環境と技術から説明するハリスによる「文化唯物論」の最大の特徴であると同時に欠点とされるのは「観念」の軽視にある．その対極にあるかに見えるのが『文化と実践理性』［サーリンズ，1987］において「文化」や「象徴」の重要性を説くサーリンズである[15]．だがサーリンズは「一方は《物質的》で，他方は《概念的》だとされる，古典的な下部構造と上部構造の二律背反は，概念体系の現存そのものによって解体される．［サーリンズ，1987: 75］」と述べる．その理由は概念体系が物質的なものを組織化しており，「概念体系の媒介項なしには，所与の物質的条件と特定の文化形態とのあいだのいかなる適切な関連も，特定化できない［サーリンズ，1987: 75］」からである．

サーリンズはこの「概念体系」と「物質的なもの」との関連に注目してマルクス主義を批判するが，それはブロックによれば「ハリスのような著作家の見解にのみ当てはまる［ブロック，1996: 182］」．マルクス自身は「概念」や「意識」を軽視していないとブロックは擁護するのである．物

[14] [Harris, 1979].

[15] 意味世界への人類学的アプローチは記号論及び象徴論によって行われてきたが，サーリンズが「意味こそが，人類学の対象に固有の特性であるという見解を主張する」―［サーリンズ，1987: 4］と明言しているのは興味深い．

質世界と観念世界の境界,「土台—上部構造」その関連の仕方がどうなっているのか．民族誌学との接合性を意識しつつこの点を掘り下げる必要がある[16].

「土台—上部構造」の妥当性を扱っているフランスを代表する人類学者はゴドリエである．クロード・レヴィ＝ストロースに捧げられた著書『観念と物質』において「観念と社会的現実，歴史とのあいだについての関係」[ゴドリエ，1986: 144] が考察され，そこには二つのテーゼがあるとゴドリエは考える．それは①観念が社会的現実をつくりだす，②土台である現実が上部構造や観念よりも優位性を持つ，どちらかである．ゴドリエに従えばマルクス主義が経済の優位性を支持するのに対して，イギリス社会人類学はアボリジニーやヌエルにおける親族の優位性を，ルイ・デュモンはインドにおける宗教の優位性を，またポランニーや実在主義は古代ギリシアにおける政治の優位性を主張すると分類される．こうした混乱は「土台—上部構造」の区分を「制度的区分」と考え，「機能的区分」とみない点にあるとゴドリエは論ずる．「上部構造」としての観念世界とは，物質世界の表象や原理，つまるところ「解釈」だとする [ゴドリエ，1986: 149]．これは巧妙な表現である．生産力や生産関係といった物質世界は観念世界を「決定」するのではなくて，観念的な「解釈」を提供するのである．「物質」と「観念」の関係性については次の表現が決定的である．

> 観念的なものは，そのあらゆる機能をふくむ思考であり，まさしく社会的存在である人間のあらゆる活動のなかに，現存し，作動している．観念的なものは，物質的なものの対立物ではない．というのも，思考するとは，物質，つまり脳を作動させることでもあるからだ．観念は，一つの現実だが，可感的ではない現実であ

[16] ブロックの1990年代の仕事は認識論と人類学の接合へと向かうこととなる．[Bloch, 1998] 参照．

る．だから，観念的なものとは，思考がなすところのものであり，その多様性は，思考機能の多様性に対応している．［ゴドリエ，1986: 177］

表象し，解釈し，組織し，正統化するとは，それぞれの仕方で意味を生産することにほかならない．［ゴドリエ，1986: 178］

ここでゴドリエは「物質」と「観念」をともに「現実」であるとし，それが感知できるか否かによって区分している．また思考機能を「意味の生産」と捉えている．したがってゴドリエによってマルクス的フレーム，「土台―上部構造」は「感覚世界から意味世界へ」と描き換えられることとなった．これは哲学の領域における存在論的問題系から認識論的問題系への移行と軌を一にする．また先のサーリンズの見解をマルクス主義批判としてではなく解釈学的人類学の積極的提唱と理解すれば同様の視座が交錯する．

ここでようやくマーカスが模索する世界規模の連関を記述する民族誌から発した問いへの議論が展開できる．マーカスはマルクス主義のフレームをベストとは考えないものの，手法としては評価する．だがウィリスの研究に対するマーカスの批判は，「労働者階級」の調査に加えて「別の階級」の人々の調査も必要とするものであった．これはある種の「多声言語（マルチフォニー）」の提唱であり，したがってここからマーカス自身の研究がアメリカの「中産階級」と「富裕階級」を併置する民族誌へと向けられ，さらには「マルチサイト民族誌」への発展が提示されたのであった．

だがゴドリエの示した「感覚世界から意味世界へ」のフレームはこれとは異なる．仮にゴドリエの立場からウィリスの研究を検討すれば，「労働者階級」という「概念」それ自体，つまり「意味」のまとまりがどのように生産されたのかを明らかにすべきであるとの批判がなされるであろう．

民族誌に描かれる「概念」がどのように構築されて「意味」としての「まとまり」をなすのか．これがはじめに述べた「調査地の変容」と「観察―記述過程」を踏まえた，政治経済と民族誌を繋ぐための基本的問いとなるのである．

5. ヴァーチャリズム

ゴドリエが示したように，マルクス主義の「土台―上部構造」の規定を「感覚世界から意味世界へ」の生成として脱マルクス的に理解するならば，「調査地の変容」と「観察―記述過程」の双方を含みこむ問題が提示される．すなわち調査地においてはそこで暮す人々は次々と変容する生活世界においてさまざまな意味世界を構築，再構築し続けているのであり，またそれを観察する調査者もフレームを刷新し続けなくてはならない．どちらの側にとっても「物質から観念へ」，「感覚世界から意味世界へ」の移行は恣意的な性格や無意識的な方向付けを伴うものである．

ここに「ヴィーチャリズム」というスタンスが浮かび上がる．文化人類学における「ヴァーチャリズム」はジェームス・キャリアーとダニエル・ミラー編集の論文集にタイトル化され，キャリアーによる序章での定義は次のようになる．

> 経済的実践は経済的思考を形成する．さらには，経済的思考が経済的実践を創り上げる．これは人々が観念や観念主義に導かれて，想像する世界を創り上げる欲望を意味する．このプロセスが本序章のタイトル，「ヴァーチャリズム」である．それは観念的カテゴリーにおける語彙で世界を見る性向であり，仮想的現実であり，現実をヴァーチャルへと創り換える行動である．[Carrier & Miller, 1998: 5]

すなわち教育や学習を通じて獲得された知的観念が世界の認識に影響を与えることで，観念世界での語彙を用いた世界解釈がそのまま「現実」として通用するプロセスが「ヴァーチャリズム」と考えられる．人間にとってのあらゆる対象がヴァーチャルな存在であると仮定した場合，ヴァーチャルとは必ずしも全くの「仮想」や「幻想」を意味するのではないし，あるいは逆の言い方をすれば「仮想」や「幻想」は無根拠に自由自在に生成されるのではない．ゴドリエにしたがえば「現実」においては「感覚可能性」を基準として「物質」と「観念」が区分される．そして「ヴァーチャリズム」の地平においてはこの両者を「現実」として据える．この意味で人間にとっての対象は感覚的なものであれ，非感覚的なものであれヴァーチャルなものである．例えば物質として現前する「パン」を想定しても，焼き上げられる以前には，また人間に食べられ消化された後には別のモノである．つまり物質としての「パン」は明らかに人間にとって「パン」という物質世界かつ意味世界の存在であって，ある時空における恒常性がその存在を保証している．しかしながらこうした「ヴァーチャリズム」の視座は，キャリアーによる考察「西欧の経済的実践における抽象化」の冒頭では次のように読み替えられていく．

> ヴァーチャリズムは世界を抽象的モデルに移しかえる試みである故に，抽象化はヴァーチャリズムの基礎である．だが新古典派経済学のように抽象的思考のシステムばかりに注意を限定しないようにすることが重要である．そのようなシステムは重要だが，実践的抽象化，日々の生活や実践における抽象化が重要なのである．[Carrier & Miller, 1998: 25]

実践的抽象化とは生活世界における「物質→観念」のベクトルを指す表現だが，キャリアーの説明では「既存の社会的実践的コンテクストから

何かを剥奪すること」と規定されるのである．単純な例としてはある組織が所属する人々を「名前」ではなく「番号」で把握するような状況であり，経済領域においては社会生活と商業生活を分離する動きを指す．キャリアーはラフスケッチとして18世紀初頭から20世紀中頃までのイギリス及びアメリカにおける生産と流通の領域を事例として提示する．

まず「家内工業(cottage industry)」では市場の要求やリズムではなく，家の成員の必要に応じて生産のペースや時期が決定される．生産に使用する場所や道具，資材も家のものである．つまり生産関係が家族関係と一体化している．これが「プッティングアウト(putting out)」になると生産の方向性や資材が商業資本に影響される．つまり生産活動がそれを実践する人々とは関係性の薄いコンテクストによって秩序化される．そして「初期工場生産(early factory production)」になれば活動する場所までもが家とは離れた場所に移動し，生産そのものが中心的な位置を占める．さらに「近代工場生産(modern factory production)」では生産が直接的に資本化に統制され，熟練労働の必要から労働の集約的な関係が構築される．

この一連の史的過程が実践的抽象化の事例として提出されることに全面的には同意できない．このコンテクストは抽象化をマルクスにおける「疎外論」をモチーフにして描いていないだろうか．本稿でマーカスの提起を出発点とし，ウィルクの整理を踏まえ，ブロックとサーリンズのすれ違い，ゴドリエの脱マルクス的志向を経て目指した「ヴァーチャリズム」とはニュアンスが異なる．キャリアーが述べる「観念的カテゴリーの語彙で世界を見る性向」という定義が矮小化されているように思われる[17]．

[17] この論文集ではミラーも「ヴァーチャリズム」の事例として世界銀行やIMFなどの具体的な制度を指摘していて冴えない．レスリー・スクレアによる論文「トランスナショナル資本家階級」が興味深い研究になっている．

6. 可視のグローバルシステム
—ヴァーチャル世界のリアリティー—

キャリアーへの批判は次のようになる．実践が思考を形成し思考が実践を創りあげるとしながらも「思考→実践」の過程を「実践的抽象化」と狭義に捉えることで，その働きが人間から生活世界の何かを剥奪する過程としてのみ見なしてしまう点が不満である．この規定では抽象化のマイナス面だけが強調されて，抽象化によってこそ生まれてくる新たな生活世界への民族誌学的接近が阻まれてしまうのではないだろうか．

物質世界と意味世界の双方を含むキャリアーの主張とは異なる「ヴァーチャリズム」の可能性はどこにあるのか．中心的課題は「意味」のまとまりの生成過程を対象とすることにあるが，その場合「意味」は観念世界で自立するのではないことに注意を払うべきである[18]．それによって二つの可能性が残る．物質世界を重視すれば社会学的な実践理論に傾倒する可能性があり，また意味世界を探ろうとすれば象徴論や記号論を含めた解釈学的人類学へ移行する．

前者はマーカスによる「マルチサイト民族誌」の提唱と重複する方向である．物質世界の重視もしくは経験論や実践理論の重視がそのドライブになっている．後者の可能性について例えばグローバル企業の世界的展開を民族誌学が対象とした場合を考えてみよう．材料の生産地や消費地としての支店を「マルチサイト」として調査していくことも一つの方法であり実行可能である．そして商品の購買動機，労働者の生活世界，資本家の私生活などへの民族誌学的接近は，ウィリスやセーブル流の民族誌が力を発揮するだろう．

---

[18] 例えば具体的な現象を「モノ」に注目し，伝記的に描くアパデュライらの研究もそうした試みの一つである [Appadurai (eds.), 1986]．だが「モノ」を重視するマテリアリズムの根源は「物質世界から観念世界へ」の飛翔を潜在的に孕むマルクス主義の延長にある．

しかしここで調査対象となる「グローバル企業」,「材料」,「生産」,「消費」,「商品」,「購買者」,「資本家」といった概念自体が物質世界と意味世界の複合物であり，その生成過程を探る試みは「マルチサイト」を提唱するだけでは掬い上げられないし，必ずしも「マルチサイト」である必要はない．これらの概念に含まれるものと抜け落ちるものを精緻に観察する作業を重視するのが後者の作業である．

さらには解釈学的人類学が行う作業に二つの方向を持たせることが後者の有効性を主張することとなる．それは①不可思議な象徴を理解可能な言説で解釈することと，②複雑な現象を単純な概念で掴み取ることである．ヴィクター・ターナーやクリフォード・ギアーツに代表される解釈学的人類学は①を重視するが，②の作業も民族誌学的作業の中に繰込まれて良い．この両者によって民族誌学は諸現象の意味を①「解読」かつ②「付与」する役割を担う．

したがってマーカスが懸念するように「マルチサイト民族誌」とは異なる方向には新たな「意味付与」としてのパラダイムの構築が予想される．だが解釈学的ヴァーチャリズムの観点から構築されるパラダイムは，そこで使用される概念それ自体への解釈学が含まれる．政治経済という領域もまた物質世界と意味世界の統合されたイメージによって支えられるために，民族誌学をいかに重視しても意味論と行為論を接合させていく方向にしか記述の可能性は残されていない[19]．

ヴァーチャル世界のリアリティーはあるときには物質的に，そして別のときには観念的に保証されるのである．そうしたパラダイム構築が進むことによってはじめて「グローバルシステム」なるものが感知されるのかもしれない．既に「グローバルシステム」なる概念が政治経済と文化人類学

[19] 人類学のポストモダン批評化は多くの場合，記述の検証よりも記述のスタイルを問題とするために有意義であるとは思えない．だがスティーブン・タイラーによる考察は非常に優れている．「ポストモダンの民族誌—オカルトの記録からオカルト的な記録へ」[マーカス＆フィッシャー，1996]．

を接合させる領域において存在するのであれば，民族誌学的接近として調査者が「グローバルシステム」概念を使用するに至った過程を詳細に検討することが第一の作業となる．どのようなプロセスを経て解釈学として使用される語彙が登場するのか，またその語彙が説明する象徴群（その意味解釈）及び，その根拠となる現象群（それへの意味付与）を記述すること．そのことは語彙の概念による説明を拒否し，生活領域と言語領域の往還を活性化する．こうした実践こそが現在文化人類学の中心課題として求められていると思われ，政治経済への民族誌学的接近は「解釈学的ヴァーチャリズム」の流れの中で，意味が統合されていく過程を調査者の認識過程としても記述して行く方向によって前進すると考えられる．

参考文献

Appadurai, Arjun (eds.),
1986, *The social life of things.* New York: Cambridge University Press.

Benton, Lauren.,
1990, *Invisible factories: The informal economy and industrial development in Spain.* New York: State University of New York Press.

Bloch, Mourice E. F.,
1998, *How we think they think: Anthropological approaches to cognition, memory and literacy.* Colorado: Westview Press.

ブロック，M.,
1996,『マルクス主義と人類学』山内昶訳，法政大学出版局．Bloch, Mourice E. F. 1983, *Marxism and anthropology: The history of a relationship.* London: Oxford University Press.

Carrier, James G. & Miller, Daniel (eds.),
1998, *Virtualism: A new political economy.* Oxford: Berg.

クリフォード，J & マーカス，G(編),
1996,『文化を書く』春日直樹他訳，紀伊國屋書店．Clifford, James & Marcus, George E. (eds.) 1986 *Writing culture: the poetics and politics of ethnography.* Berkeley: University of California Press.

ゴドリエ，M.,

1986,『観念と物質』山内昶訳，法政大学出版局. Godelier, Maurice 1984 *L'Idéel et le matériel*. Librairie Arthème Fayard.

Gluckman, Max (eds.),

1964, *Closed systems and open minds: The limits of naivety in social anthropology*. Chicago: Aldine.

Harris, Marvin.,

1979, *Cultural materialism: The struggle for a science of culture*. New York: Random House.

栗本慎一郎

1979,『経済人類学』東洋経済新報社.

Marcus, George E.,

1998 [1995], The Ethnography in/of the World System. *Ethnography through thick and thin*. Princeton University Press.

マーカス，G & フィッシャー，M.,

1989,『文化批判としての人類学』永渕康之訳，紀伊國屋書店. Marcus, George E. & Fischer, Michael M. J. 1986 *Anthropology as cultural critique: An experimental moment in the human science*. Chicago: The University of Chicago Press.

Mintz, Sidney.,

1960, *Worker in the cane: A Puerto Rican life history*. New Haven: Yale University Press.

ミンツ，S.,

1988,『甘さと権力』川北稔・和田光弘訳，平凡社. Mintz, Sidney 1985 *Sweetness and power: The place of sugar in modern history*. New York: Viking.

Nash, June.,

1979, *We eat the mines and the mines eat us: Dependency and exploitation in Bolivian tin mines*. New York: Columbia University Press.

Leacock, Eleanor. B.,

1981, *Myths of male dominance : Collected articles on women cross-culturally*. New York: Monthly Review Press.

Sabel, Charles F.,

1982, *Work and politics: The division of labor in industry*. New York: Cambridge University Press.

サーリンズ，M.,

1987,『人類学と文化記号論』山内昶訳，法政大学出版局. Sahlins, Marshall 1976 *Culture and practical reason.* Chicago: The University of Chicago Press.

Taussig, Michael T.,

1980, *The devil and commodity fetishism in South America.* Chapel Hill: The University of North Carolina Press.

ウォーラーステイン，I.,

1981,『近代世界システムI—農業資本主義と「ヨーロッパ世界経済」の成立—』川北稔訳，岩波現代選書. Wallerstein, Immanuel 1974 *The modern World-System: Capitalist agriculture and the European World-Economy in the sixteen century.* New York: Academic Press.

Wilk, Richard R.,

1996, *Economies and cultures: Foundations of economic anthropology.* Colorado: Westview Press.

ウィリス，P.,

1996,『ハマータウンの野郎ども』熊沢誠・山田潤訳，ちくま学芸文庫. Willis, Paul 1981 [1977] *Learning to labour: How working class kids get working class jobs.* New York: Columbia University Press.

Wolf, Eric.,

1982, *Europe and the people without history.* Berkeley: University of California Press.